毒華の果てに — 陽の精を注ぐ夜 —

廃寺の奥庭に立つ大杉——その洞に巣食ったのは、百年を生きた**蠱毒の絡新婦（くどくのじょろうぐも）**だった。

吐き出される呪糸を雷の太刀で薙ぎ払い、頼子が四天王の分身を召喚して斬り伏せ、薫子が「源氏物語・葵・物の怪」でとどめの詩歌を詠む。連携に一分の隙もなかった。

ただ——

魔性が消え去る間際、絡新婦は最期の一糸を頼子の左腕に刺し入れたのである。

「……頼子姉さま？」

戦闘を終えて振り返った薫子の目の前で、頼子の巨躯がゆっくりと傾いだ。

「——っ、頼子姉さま!?」

地面に倒れ込む寸前、薫子が抱きとめる。190cmの頼子の体重を受け止めきれず、二人分の肢体が落ち葉の絨毯に沈み込んだ。

頼子の顔は異様なほど紅潮し、吐く息は熱い。額に手を当てれば、触れていられないほどの高熱。

「……さむ……い……いや、あつい……かおこ、さま……」

うわ言のような頼子の声に、薫子は即座に印を結ぶ。

「——**泰山解説祭**」

頼子の身体を包むように浮かび上がる墨文字の列。薫子の瞳がその文字を追うにつれて、表情が強張っていく。

「……絡新婦の**蠱毒（こどく）**。陰の気を急速に増大させ、体内の陽気と均衡を崩し、ついには生命活動を停止させる——そんな、なんて酷い毒を……っ」

薫子の声が震える。

「解毒の方法は……**大量の陽の精を体内に注ぎ込むこと**……？」

墨文字を見つめ、薫子は唇を噛んだ。陽の精。男性器から放たれる、生命の源たる精。しかし今ここにそんなものは——

——いや。

「……あります」

薫子は静かに呟き、頼子の帯に手をかけた。

「晴明様直伝、と申し上げても——これは本当に、我流の歪みに歪んだ邪道でございますが」

戦装束を解き、汗に濡れた頼子の下腹部を露わにする。鍛え上げられた腹筋、そしてその下——。

薫子は両手で複雑な印を結び、流麗な陰陽の術式を頼子の肌の上に直接描いていく。指先から溢れる淡い光が、頼子の皮膚を伝って臍下に集まり、やがて一つの形を象り始めた。

「——**形代顕現（かたしろけんげん）**」

ぼぅ、と一際強く印が輝き、頼子の身体がわずかに跳ねる。

そして——

頼子の女性器のすぐ上、臍下三寸の位置に、それは現れた。

ずしりと重く、太く、月明かりを照り返す白い肌に映える——**男根**。

受肉したバーサーカーの肉体が持つ戦士としての膂力に比例してか、それは並の男性のそれを遥かに超える質量を備えていた。長さはゆうに20cmを超え、幹の太さは薫子の手首ほどにもあろうか。先端はまだ柔らかい包皮に包まれているが、すでに熱を帯びて脈打っている。

「……っ❤」

あまりの威容に一瞬息を呑んだ薫子だが、頼子の容態は一刻を争う。

「頼子姉さま……今、私が貴女を助けます。どうか——どうか、ご無事で」

薫子は着物の裾を割り、荒い息を吐く頼子の腰を跨いだ。

自分の秘所は、すでに濡れていた。頼子の倒れた姿に心臓が張り裂けそうなほど怖かったのだ。それなのに——いや、だからこそか、薫子の「蛸壺」はとろとろと蜜を滴らせ、男根を受け入れる準備をとうに整えていた。

「いざ——参ります」

薫子は右手で男根の根元を支え、自らの秘裂に先端をあてがう。

ぐちゅり——ぬかるんだ入り口に亀頭が沈み込む。

「ん"ぅっ……❤❤」

ずぶずぶずぶ——。

名器「蛸壺」の無数の襞が男根を吸い寄せ、根元まで一気に飲み込んでいく。自分で腰を下ろしながら、薫子はその質量に目の前が白く染まるのを感じた。これまで頼子の指を何度も受け入れてきたが、指とは比べ物にならない。熱く、硬く、そして何より——**生命の気配**がみなぎっている。

「頼子姉さま……っ、はいり、ました……❤❤❤」

その言葉を待っていたかのように——

頼子の目が、ぱちりと開いた。

「……かおこ……さま……？」

頼子の声はかすれ、焦点の合わない瞳が薫子を映す。しかしその奥で——蠱毒に侵された本能が、**陽の気**を感知して牙を剥いた。

「あ……あつい……あついのです、かおこさま……なにか、なにかを、ださねば……っ」

「大丈夫です、頼子姉さま。さあ——私に、すべてを」

薫子が優しく微笑みかけ、自ら腰を浮かせて——もう一度、深く沈み込んだ。

ぐぽっ❤❤❤

「————ッ❤❤❤!!!」

その瞬間、頼子の中で何かが弾けた。

「かおこさまぁっ!!」

獣じみた咆哮と同時に、頼子の両手が薫子の108cmの豊かな臀をわしづかむ。戦士の膂力で引き寄せられ、二人の結合部はさらに深く——子宮口に亀頭がめり込むほどに——密着した。

「あ"っ❤❤❤ おく、おくまで……！」

「うごきます……うごかせてください、かおこさま……!!」

「ええ、ええ、どうぞ……私のことはおかまいなく……ひゃう"っ❤❤❤!!」

ずちゅんっ!! ずちゅんっ!! ずちゅんっ!!

頼子の腰が下から容赦なく突き上げられる。毒気に朦朧とした意識の中、ただ「陽の精を吐き出す」という本能だけに駆動されて、頼子の巨躯は獣のように薫子を貪り始めた。

普段の雅で丁重な頼子からは想像もできない無遠慮な抽送。20cm超の剛直が薫子の狭い膣内を抉り、無数の襞を無理やりに拡張しながら、奥へ奥へと突き進む。

「あ"っ❤ ひゃっ❤❤ それ、それすご……ふか、すぎ……❤❤❤」

「かおこさま、かおこさまぁ……もっと、もっとぉ……!!」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ——！

結合部から溢れる愛液が泡立ち、淫らな水音が夜の闇に響き渡る。薫子の115cmの双丘は激しい抽送の度に大きく揺れ、頼子はそのふくらみに吸い寄せられるように片方の蕾を口に含んだ。

「ひやあぁぁっ❤❤❤!! だめ、だめぇ……さきに、さきにいったら……!!」

じゅるるるると乳首を吸い上げながら、頼子の腰はさらに加速する。

「いく……だします、かおこさま……なかに、ぜんぶ……!!」

「ええ、どうぞ……っ、だして、だしてくださいぃ……❤❤❤!!」

どぷっ——どぷどぷどぷどぷどぷ————————ッ!!!!

頼子の男根が激しく脈打ち、灼熱の精が薫子の子宮口に直接叩きつけられる。その量は常軌を逸しており、一射、二射、三射と止めどなく注ぎ込まれる精は、薫子の膣内を満たし、結合部から溢れ出して二人の腿を白く汚していった。

「あ"あ"あ"あ"あ"——————————ッッ❤❤❤!!!」

膣内を灼熱で満たされる感覚に、薫子もまた絶頂を迎えた。名器「蛸壺」がぎゅうぎゅうと男根を締め付け、さらなる精を搾り取ろうと蠕動する。

しかし——

まだ終わりではなかった。

「……たりない……まだ、まだあつい……かおこさま……!!」

蠱毒の陰気はそれほどに根深い。頼子の男根は萎えるどころか、さらに硬度を増して薫子の奥を抉っている。

「え……あ、まだ……っ❤❤❤」

ぐるん——と天地がひっくり返る。

頼子が薫子の身体を抱えたまま、褥の上で上下を入れ替えたのだ。今度は頼子が上になり、薫子を見下ろす形。

「かおこさま……もっと、もっとぉ……!!」

「あぁっ❤ まって、まってぇ……まだ、いったばかりで……ひぅんっ❤❤❤!!」

待つはずもない。毒気に駆られた頼子は、獣のように腰を打ち付け始める。さきほどまで自分が攻めていた姿勢のまま、今度は組み敷かれての抽送に、薫子の肢体は簡単に跳ね上がる。

ずちゅんっ❤ ぐぽっ❤❤ ずちゅちゅちゅっ❤❤❤

「あ"っ❤ や、やめ……やめないで……❤❤ ちが、ちがうの……もっと、もっとしてぇ……❤❤❤」

すでに二度の絶頂で蕩けきった薫子の身体は、快楽を拒むどころか積極的に頼子を求め始めている。両脚を頼子の背中に絡め、腕を首に回し、自ら腰を押し付けてさらに深い結合をねだる。

「かおこさま……なか、あつい……きもちいい……❤❤」

「わ、私も……私もです、頼子姉さま……もっと、もっと突いて……私の奥、壊れるくらいにぃ……❤❤❤」

頼子の動きは無秩序で、野獣じみてはいたが、それゆえに薫子の予想を超える角度から子宮口を抉り、クリトリスを擦り上げた。まさに「計算できない快楽」。それが、物語のすべてを構成したがる作家の性を持つ薫子には、何よりも甘美な毒となった。

「また——またいく……かおこさま、うごきます、いっしょに……!!」

「ええ、ええぇ……❤❤❤ ご一緒に、ご一緒にぃ……!!」

どぷっ、どぷどぷどぷどぷ———ッ!!!!

二度目の射精は一度目よりもさらに濃く、熱く、大量だった。薫子の胎内を灼熱で埋め尽くしながら、それでもなお頼子の腰は止まらず、三度、四度と——

夜明けまで、それは続いた。

——どのくらい経ったのだろう。

薫子が薄く目を開けると、窓の外は白み始めていた。

身体は——まるで動かない。

喉は嗄れ、瞼は泣き腫らして重く、腿のあいだから腹の中まで、どろりと満たされた熱い感触が広がっている。褥は汗と愛液と精でぐっしょりと濡れ、むせかえるような雌と雄の匂いが寝室を満たしていた。

「……ぅ……」

かろうじて首を動かせば、すぐ隣に頼子が横たわっている。

その顔からは毒気の紅潮は消え、普段の雅で清潔な頼子の面差しに戻っていた。どうやら蠱毒は——薫子が搾り取った大量の陽の精によって——綺麗に消え去ったらしい。

そして頼子の臍下にあった男根も、役目を終えたように消え失せていた。

「……ん……」

小さなうめき声とともに、頼子の睫毛が震える。

ぱちり、と開いた瞳が、ぼんやりと天井を見上げ——次いで、隣の薫子を映した。

「……香子……さま……？」

焦点が合う。記憶が、ゆっくりと戻ってくる。

自分の身体に起きた異変。毒気に灼かれる苦しみ。そして——

「————ッ!?」

頼子は飛び起きた。両手で薫子の肩を抱き、その全身をまじまじと見つめる。薫子の白い肌に散った無数の紅い痕。乳房に残る歯形。腿の内側を伝う白濁。そしてなにより——褥に広がる大量の精の染み。

「あ……、ああ……っ、香子さま……これは、私が……？」

震える声で問う頼子の双眸が、みるみるうちに潤んでいく。

「わ、私が……貴女に……こんな……！」

「頼子姉さま……落ち着いて……」

「こんなことがあって、落ち着けるはずが——貴女を、私のせいで——っ」

ぼろぼろと涙を零し始めた頼子に、薫子はゆっくりと手を伸ばし、その頬に触れた。

「私は——大丈夫です」

「ですが、この痕……それに、その……っ、本当に、なんとお詫びを……」

「頼子姉さま」

薫子は静かに、しかしはっきりと言った。

「私は——貴女を助けたくて、あの術を使いました。そして貴女は、見事に毒を祓い切りました。それで、すべてです」

「しかし……！」

「それに」

薫子の声が、ほんの少しだけ甘く揺れた。

「私は……嫌ではありませんでした」

「……え……？」

頼子の涙が止まる。

「むしろ——」

薫子は、まだほとんど動かない首をかしげて、頼子にそっと微笑みかけた。その笑みには、平安の才女としての矜持と、そして一匹の雌としての素直な悦びが、等分に混ざっていた。

「**あのような悦びは、生まれて初めてでございました**❤❤❤」

頼子の頬が、さあっと赤く染まる。

「香子さま……それ、は……」

「頼子姉さまに与えられる快楽の嵐。私のなかの詞がぜんぶ吹き飛んで、ただ感じることだけしかできなくなるほど——私は、蕩けてしまいました❤❤❤」

「か、香子さま……そのようなことをおっしゃると……私、ますますどうお詫びをすれば……」

「ですから」

薫子の指が、頼子の唇にそっと触れる。

「お詫びなど不要です。ただ——」

一瞬の沈黙。

「また、機会がございましたら……その……**ぜひ、また**……なんて」

「〜〜〜〜っ!?」

頼子は文字通り硬直した。涙も引っ込んだ。顔は耳の先まで真っ赤に染まり、開いた口がぱくぱくと空を噛む。

「こ、こんな時に……！ 香子さまは、本当に……！」

「ふふっ。——私は、貴女にそうやって慌てていただくのも、大好きですよ。頼子姉さま❤❤」

そう言って微笑む薫子の瞳の奥に、頼子は見逃さなかった。

——**次はもっと、計画的に**——

そんな、文士の欲望がちらりと光るのを。

「……香子さま。私はこれから、貴女の陰陽術の本棚を厳重に検閲させていただきます」

「まあ！ 頼子姉さまったら、文の検閲は言論統制でございますよ？❤❤」

「結構です！ それと——ご実家から取り寄せたという『安倍晴明直伝・秘術纂要』とやらは、本日付で発禁です!!」

「そんなぁ……❤❤❤」

むせかえるような雌の匂いが満ちる寝室で、二人の声はやがて、どちらからともなく漏れた笑い声へと変わっていった。

——こうして古書店「恋綴」に、また一つ、秘密の一節が綴られたのである。

【注・薫子の日記より抜粋】

> ——頼子姉さまが書庫から没収なさった『安倍晴明直伝・秘術纂要』は、事前に書き写した副本がございます。
> 念のため。
> あくまでも念のためでございます。
>
> ……それと、あの術式を改良すれば、さらに長時間の顕現が可能になるのではないかと——
> いいえ、これは決して、私の個人的な欲望ではございません。
> 頼子姉さまの、万が一のための、備えにございます。
>
> ——備えに、ございますとも❤❤❤

——終——